

Eureka VII

六年制通信 No.33 令和2年2月28日(金)号

若者の可能性

将棋にはプロ編入試験があります。プロの養成機関を奨励会というのですが、26歳までに四段になれば退会しなければならない厳しい規定があります。ところが、アマとして活躍をつづけ、ある基準を満たすと編入試験を受けられるのです。先日新聞に載っていましたが、折田翔吾(30)さんが見事合格、プロの四段になりました。すごいですね。諦めずに、腐らずに、成長を続けると夢はかなう。折田さんは存在自体が若者へのエールになっているように思います。

ただ、よく「若者には無限の可能性がある」と言われますが、私はあれは嘘、ないし言葉足らずだと思います。そんなことを言えば、子どもは「勉強すれば、そして大人になれば自分は何でもできるようになるのではないか」と考えてしまうでしょう。ところが実際は、勉強を続けると、そして大人になると「自分は何でもできるというわけではないのだ」と気づくわけです。そして、そう気づくことができるためにこそ私たちは勉強していると言ってよいと思うのです。何でもできるわけではないと知ると同時に、自分にはこれがあるという何かを見つけること、折田さんに将棋があったようにね。そのことが最も大切なことだと思います。

多くのことができなくても構わないと思います。私の尊敬する明治の軍人秋山好古は「生涯に一事を為せばよい」と言っています。彼の人生はまさにそうでした。羨ましい限りです。では好古はその一事をどうやって見つけたのでしょうか。待っていれば見つかったのでしょうか。そのあたりに落ちていたのでしょうか。不意に向こうからやって来たのでしょうか。好古の場合は、必然か偶然か、そこしかなかったというのが正確でしょう。お金のかからない学校という選択肢しかなかったのですね。その仕事が自分に向いているかどうかよりも優先すべきことがあったわけですが、選んだのちは、与えられた職務に精励し続け、立派な軍人へと成長します。彼の選択は今の私たちには理解できないかもしれませんが。私たちは今の時代に生きているのですから当時のことはわかりません。私たちなら、自分の弱点を理解し、同時に自分の強みにも気づき、気づいてから一生の仕事を選ぼうとするでしょう。それが今の時代に生きる私たちには納得できる選択だと思います。しかし、その時代の中にいる者はその時代の特徴がどんなものであるのかは決してわからないものです。それが人間の弱さだと、小林秀雄は言っています。好古も当時としては当たり前の選択をただけのことでしょう。ただ、与えられた持ち場で成長した、そういう生き方です。

成長とは、よく言うように、次の段階を踏みます。

「自分が何も知らないことを知らない」
「自分が何も知らないことを知っている」
「自分が何を知っているかを知っている」
「自分が何を知らないかを知っている」

好古はそれまで日本軍にはなかった騎兵隊を作った男です。それこそ何もわからない状態から試行錯誤を重ね、最強の部隊を作り上げます。好古自身も成長の段階を踏んでいったに違いないと思います。私はこういう姿に若者の可能性を見ます。

成長とは何か、少し簡単な言い方をしてみましょう。充実した基礎訓練ののちに試行錯誤を重ねると、そこに必ず変化が生まれます、そのことを成長と呼んでいいのではないかと思います。基礎訓練を怠った技術は使い物にはなりません。試行錯誤には自分に正直であることが欠かせません。生まれた変化を見逃さないためには冷静な心が必要です。それらを繰り返して成長していくには、何と言っても辛抱強さがなくてはなりません。

プロになった折田さんも、辛抱強く訓練と試行錯誤を繰り返したことでしょう。自分の大好きな将棋の道だからできた、そういう人がいるかもしれません。だったら好古の場合はどうでしょう。彼は与えられた道を力強く歩いていきました。私は、どの道においても成長できるという、若者の可能性を信じたいと思っています。

今週のおすすめ

・福田和也 『なぜ日本人はかくも幼稚になったのか』 (角川春樹事務所)

1996 年、今から 24 年前、私と同年の著者が 36 歳の時に書いた本です。

1995 年にオウム真理教による地下鉄サリン事件があり、その数日後に当時警察庁のトップであった國松長官が何者かに狙撃されるという事件がありました。出勤のためマンションを出たところを狙われたらしいのですが、この事件に対し私の父が「警察のトップが撃たれるとは何とかつこ悪いことか。満天下に恥をさらしたも同然や」と言っていたのを鮮明に覚えています。そんな感想は、当時の私は持っていなかったもので新鮮な感じで聞いていましたが、福田さんのこの本の第 1 章に父と同じ意見が書かれていたので驚きました。私と同年の感想に驚いたのですね。

彼によると大人とは「高い価値観を人に押しつけることができる者」だそうで、そうすると「多くの責任が生じる」から「今の善良でやさしい思いやりのある日本人はこのような責任から逃れたい」ので「すべてにものわかりがよく、相手の立場を尊重し、自説を主張せず人あたりがよく」なっているだけにすぎない。それは「成熟しているのではなく、面倒なことを避けているだけだ」と、エピローグには書かれています。24 年前の日本の論壇とか社会の様子を知らないと、君たちは著者が何を言っているのかピンと来ないかもしれません。それに、著者の論調には、魅力を感じる人と嫌悪を感じる人がはっきりと分かれるだろうと思います。

少し読んでみて、肌に合わなければ読まないほうがいいかな…。

BGM は シーナ・イーストン の スペインの休日 でした…。